

令和6年度「小学校区教育協議会—はぐくみネット—」事業・学校元気アップ地域本部事業 合同実践報告会

大阪市では小学校区における「小学校区教育協議会—はぐくみネット—」事業のほか、中学校区においても学校・家庭・地域の組織的な連携のもと、地域社会全体で子どもたちを育てる「学校元気アップ地域本部事業」を実施しています。両事業の推進に向け、事業関係者及び事業に関心のある方が、事例などを通して両事業の成果と課題を共有し、教育コミュニティづくりと学校教育支援活動についてともに考え、交流する機会として合同実践報告会を開催しています。

日 程：令和7年1月17日（金）14:00～16:30

会 場：大阪市立総合生涯学習センター 第1研修室

テーマ：「地域と学校との連携」

内 容：基調講演／「ふくしと教育の実践研究所 SOLA」主宰 新崎 国広

事例報告／清水丘小学校区はぐくみネット（住吉区）

／東中学校区学校元気アップ地域本部（中央区）

意見交流会

参加人数：はぐくみ関係者17名、全体27名

【基調講演】



「ほっとかれへん！子どもたちの未来、私達の未来 ～学校・家庭・地域で育む子どもたちの未来～」と題して、社会福祉の専門家であり、大阪教育大学教育協働学科教授として後進の指導にあたられ、退官後の現在は「ふくしと教育の実践研究所 SOLA」を主宰されている新崎国広さんにお話いただきました。

（以下講演のまとめ）

1. 地域共生社会の今日的意義

学校が抱える課題は、不登校・いじめ・子どもの貧困・発達に課題がある子どもへの対応など、複合的に多様化し、教員だけで対応することがとても難しい。現代の子どもたちや地域を取り巻く環境も非常に厳しく、社会的孤立が大きな問題になっている。セルフネグレクト（自暴自棄）は高齢者だけではなく若者にも見られ、ひきこもり・不登校・児童虐待などの社会的な孤立の状況がある。子どもの貧困は深刻で、2017年には7人に1人の子どもが相対的貧困といわれている。絶対的貧困とは明日食べるものがないといった状況を指すが、相対的貧困は経済的理由などで、同年代の子どもたちが体験する学びや遊びの機会を得られず、社会的なつながりの制限を受け、生きる意欲の喪失や将来への希望を失うという状況を指す。また家庭状況のために介護や家事を手伝わなければならないヤングケアラーも社会的問題となっている。こうした環境にいる子どもたちが子どもらしく暮らせて、社会とつながっていくきっかけの仕組みとして、はぐくみネットや学校元気アップ事業のコーディネーターの活動は大きな意味を持っている。中央教育審議会では、教員だけでなく、地域なども含めて社会総がかりで教育の実現を図るとし、大阪市ではいわゆる学校協議会で、学校が地域の方々の意見を聞くという仕組みができています。学校

と地域の方々が一緒に関わることで、学校行事や教育活動が地域の方と繋がっていく。地域に学校の応援団を作っていく、というのが地域共生社会の今日的意義である。

2. 学校・家庭・地域の協働による教育支援・教育協働

教育支援活動を行う上での心の持ち方、幸せになる（well-being）4つの因子。

- ① 「やってみよう因子」 自分は駄目、自信がないと思ってしまうのではなく、チャレンジ精神で、やれるかどうか分からないがチャレンジする。それが成長や自己実現に繋がる。
- ② 「ありがとう因子」 「また来てね。おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。」といった子どもたちの感謝や喜んでる姿が、活動のエネルギーになる。
- ③ 「何とかなる因子」 コロナ禍の間、学校支援活動がストップした。やっと動き出したばかりの時でも、「何とかなるんじゃないか」「こんなことができたら面白いよね」と前向きに考える。
- ④ 「ありのままの因子」 今できることをできる範囲で主体的に動いていく。背伸びをするのではなく、今できることをすることで、自分らしさが発揮できる。

● **お節介**は良くないという印象があるが、「節」は節度のあること、「介」は介護の介、介入の介、「仲立ち」とも読め、間に入って取り持つ意味で、英語に訳すとコーディネート。まさにはぐくみや学校元気アップの方々の役割である。本当の意味の**お節介さん**は目配り気配り心配りができて、他人の困りごとを放っておけない人。そんな人が地域に増えていくことが、子どもたちの笑顔に繋がっていく。

● 一人ひとりの子どもたちの**違いを認める**。みんな違ってみんな良いということが非常に重要である。

● 独りぼっちにしない心。人間はたった1人では生きていけない。自分のことは自分です、他人に迷惑をかけないということは大事だが、自分ができることを精一杯やって、それでもできないときに、「ちょっと助けて」「一緒にやって」と誰かに声をかける**勇気（助けられ上手になる）**も大切。1人で頑張りすぎると結果として孤立に繋がる。困り事を抱える子どもたちに、それを伝えていける人がいることが大事で、地域の人たちとのつながりが支えになる。

● **自尊感情・自己有用感**を育む。「自分は駄目な人間だと思えることがあるか」という質問への回答で、日本の若者・子どもたちは「ある」が他の国に比べて多い。自尊感情や自己有用感とは、自分を肯定的に認めて自信を持ち、他人への思いやりの気持ちを持つことで、「だから自分は価値あるもの」と誇れる気持ち。欠点もあるが一生懸命努力している自分を肯定的にとらえる。自分に自信を持たないと、他人に対する思いやりは生まれてこないと言われる。自分は誰かに愛されている、必要とされているということが、子どもたちの**セルフエスティーム（自尊心）**を高める。

● 相互実現の関係

【縦の関係】 親は子どもを立派に育てるという責任感がある。先生は、子どもたちの成績を伸ばし、元気になってもらうという責任がある。親も先生も責任重大で緊張感が強い。

【横の関係】 生徒同士、同級生同士では仲間意識・友達関係で、仲の良いときはすごく仲が良いが、ちょっともめると緊張感が強まり、最悪の状況がいじめの関係になる。

【斜めの関係】 縦・横の関係に対して、緊張感のない、温かくやさしい関係が斜めの関係。例えば見守り隊の方が「気をつけてね、元気でいておいで」など子どもたちに声掛けすると、子どもたちは地域の人の応援を感じ、大切にされていると思える。こうした支援に関わっている方も、子どもたちから学

んだり、元氣をもらったりする。この斜めの関係というのが相互実現の世界である。

3. ボランティア活動 大人も「助け上手・助けられ上手」

① 目標を設定し、共有化する

はぐくみネットや元氣アップ事業の方だけで計画せず、学校の先生も一緒になって、どんな子どもたちを育てたいか、どんな地域になっていきたいかの目標を設定し、共有することが大切。

② 率先して実行する

共有した目標の実施について、指示を受けるまで待っていると元氣がなくなる。気づいたときに率先して、私がやりますと積極的に行動する。それによって周りの人の主体性も繋がってくる。主体性は主体性を生む。皆さんのやる気元氣・リーダーシップが組織全体のやる気元氣に伝わっていく。

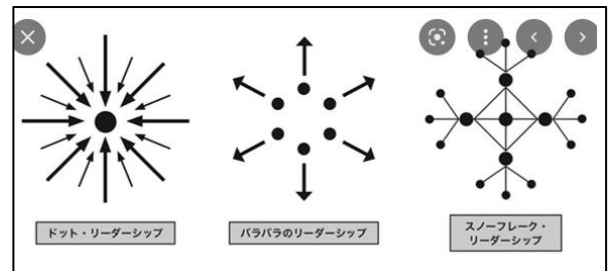
③ 相互支援 助け上手・助けられ上手の支援を

問題を提案し率先してやっていくと、時には言い出した人だけが汗をかくようなことが起こる。提案した人が主体的に動いていく中で、でもちょっと負担があるなと思ったときは「ちょっと助けて、ここ手伝って」と、必要な支援要請について自ら声かけをすることも大切である。また、初めて関わる方々に対しては、わかりやすいアドバイスを行う。仲間（バディ）を見つけて、1人で頑張るのではなく、チームとして動いていく。

以上の3点はどこから始めてもいい。

◎スノーフレクリーダーシップ

今までのリーダーシップは、まずリーダーがいて提案し、周りの人が従って動いていく、というドット型リーダーシップ。この場合リーダーがカリスマ的なリーダーシップを持っているときは良いが、例えばその方が不在になって、次世代のリーダーを探すとなるとたちまち課題が残る。スノーフレクリーダーシップとは、雪の結晶ができるように、参加者一人ひとりのストーリー＝思いを話し合い、共感した人が集まり、それをまた仲間に伝えていくことによって、雪の結晶が広がるように、広がっていく、という形態。このスノーフレクリーダーシップというあり方が今後非常に重要であると言われている。そしてスノーフレクリーダーシップを発揮するためには、組織の中での有効な人間関係が重要である。



皆さんがリーダーやコーディネーターになったときに留意していただきたいのは、いわゆる後輩や仲間からの提案について、「それは駄目、駄目」とすぐに否定せず一旦は受け止めること。「なるほどね、すてきだね」と受け止めながら、全体で考え、話していきながら共通の目的を一緒に作っていく。それによってやるべき課題が一致し、組織が目指したい目的・目標を共有できる。こうした関係性の築き方が地域の活性化に繋がる。

4. ウォーキング WALKING の勧め

次の7つの言葉の頭文字 WALKING をちょっと意識しながら活動を続けてほしい。

- ウエイト Wait・・・待つ。子どもたちの力を信じて待つ、話を聞く力、聞き上手になる。
- アクション Action・・・行動。子どもたちと一緒に動く行動力、エネルギーも必要。

- ルック Look・・・観察。子どもたちの良いところ、学校の先生方の頑張っているところを、探してあげる。良いところを探しながら、弱いところと一緒にカバーし合う関係づくり。
- カインドネス Kindness・・・親切。子どもたちや保護者の方々に対する思いやり。
- アイスブレイク Ice-break・・・緊張感をほぐす。ユーモアは子どもや保護者・先生と繋がる大きな力。
- ナラティブ Narrative・・・語り。話し上手と聞き上手、皆さんの思いを先生方にぶつける。そして、先生方の思いの聞き上手になる。お互いの思いを共有し、子どもたちに何ができるかを一緒に考える。
- ゲイエティ Gaiety・・・陽気さ。こうした活動に参加されている方々は、本当にユーモアたっぷりである方が多い。子どもたちや保護者、学校の先生方をリラックスさせる明るさも必要。

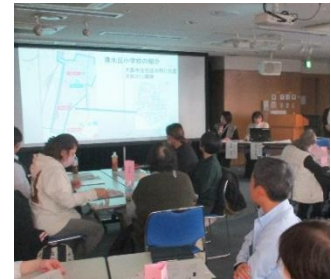
以上、新崎先生には、福祉の専門家としての視点も入れながら、支援する側・される側双方の実情を踏まえて解説いただき、地域のコーディネーターが活動を継続していくための気持ちの持ち方などを、わかりやすくお話しいただきました。

【事例報告】「小学校区教育協議会—はぐくみネット—」事業

住吉区の清水丘小学校区ははぐくみネットから「はぐくみネットが取り持つ地域活動～防災・防犯～」というテーマで、学校の全学年挙げての防災訓練に地域が協力している活動を中心に、防犯や地域活動の様子を報告されました。

1. 防災サバイバル

清水丘小学校区は住吉区の中でも一番南に位置する校区で、大和川に隣接している。大和川の通常の水量は少なく、河川敷は遊歩道になっているが、過去には大雨で氾濫の危険があったこともある。近年の水害事例を考えると、万一大和川が氾濫した場合、校区の一部地域では、浸水の最も深い所で5mを超えると予測されている。そこで、地域では「防災に興味を持って、個々の防災意識を高めてほしい」という思いがあった。



防災体験学習の「防災サバイバル」のきっかけは、以前に清水丘小学校の5年生全員がNHK大阪放送局主催の「大阪防災サバイバル」に参加し、防災について楽しく学習してきたことで、保護者から「小学校でこうした体験授業ができないか」という要望が上がったことである。この保護者の思いと、地域住民が防災意識を高め、災害に強い、安全安心なまちづくりを進めるとともに、児童にも防災意識を高めてもらいたい、という地域の思いが合致し、学校とも協議して、体験授業の実施にむけて、コーディネーター会議で準備を始めた。

体験学習のねらいは自助・共助の精神を養うこと。地震発生を想定した問題に答えたり、ミッションの体験をしたりして、防災・減災の知識を習得する。児童が楽しみながら取り組めるよう、防災ミッションをクリアするたびにサバイバルカードがもらえ、すべてクリアしたら清水丘防災レンジャーの認定証をもらえる設定にした。今日は阪神・淡路大震災からちょうど30年であるが、本校では震災以後の修学旅行先が淡路島方面になり、北淡震災記念公園も行程に含まれている。そこで防災サバイバルには、阪神・淡路大震災のスライド鑑賞も含めた。学校とコーディネーターで事前協議を重ね、学習会の運営スタッフとして、PTA 実行委員・地域活動協議会・女性部の方々をコーディネートした。こうして実施した令

和元年度の防災サバイバル学習は児童や保護者・地域の方々にも好評で、次年度も継続する予定だったが、実施翌月からコロナ禍が広まった。そこで1年後の「防災サバイバル」では座学をメインにし、新聞紙でのスリッパや食器作り、段ボールベッド体験をした。教科学習では学ぶことの少ない防災の知識や体験の学習で、児童からは新鮮な意見や驚きの声を聞くことができた。

今年度は防災学習を全学年で実施したいという学校の要望があり、1日防災デイとして、住吉区役所、住吉消防署の指導協力のもと、7つのセクションで体験学習を実施した。

- ・地震体験のできる起震車： 4～6年生が震度7の揺れを体験。
- ・煙ハウス： バニラの匂いのする煙で充満したテント内を手探りで通り抜ける体験。
- ・消火器： 校庭の木を火柱と見立てて、水が噴射される水消火器を自分で操作する体験。
- ・胸骨圧迫： 救急救命の大切さを知るビデオと消防士の説明を聞いた後、体験用のグッズを使って胸骨圧迫をしてみる体験。
- ・救助体験： 高学年の5人組が協力し合って担架で人を運ぶ訓練。
- ・バケツリレー： 低学年が体験。水が入ったバケツを、声を出しながらリレーする。協調性を学ぶ。
- ・防災クイズとラジオ操作訓練： 防災に関するクイズを解きながら知識を習得する。



防災ラジオに乾電池をセットしたり、周波数を合わせて情報を入手したりする訓練で、デジタル操作に慣れた児童にとってラジオの周波数を合わせるのが非常に難しかったようだ。

児童には、いざという時には完璧でなくていいので、自らどうしたら良いのかを考える力を、この防災学習で身に付けてくれることを期待し、活動を継続していきたい。

2. 防犯活動

地域では防犯にも力を入れており、地域のつながりも重視している。そこで今年度から「こども110番の家」巡りを企画し、応募型で実施した。私達の校区は、大規模商業施設はもちろん、一般の店舗も非常に少ない校区であるが、50軒ほどが「こども110番の家」として登録されている。子どもたちは、こども110番の旗がある家を知っているのだろうか、何かあったときに知らない場所や知らない人の家に飛び込めるだろうか。そんな不安を解消するために、この企画の目標を、こども110番の家を自分で探してその家の方と話してみる、同時に通学路や普段遊ぶ場所の安全を確認する、とした。コロナ禍の最中ではあったが、まず区役所、社会福祉協議会、警察署と連携をとり、登録先を確認し、古い旗を新しい旗に交換した。開催時期は1年生が小学校生活に慣れてきた1学期で、夏休みに入る前に体験させたいということで、6月の実施となった。

PTA や地域の方々、中学生ボランティア、大阪公立大学の学生さん、区役所職員、警察署員に協力を仰ぎながら、校区を8ルートに分かれて10ヶ所を訪問した。区役所には青色防犯パトロール車（青パト）に巡回してもらい、警察署には校庭でのパトカーの乗車体験や撮影会、交通安全や防犯の学習会をしてもらった。また訪問した家で1文字ずつ書かれたカードをもらって、帰校後にカードを並び替えて言葉づくりをする、というクイズも取り入れた。PTA による誘導であっても、道に迷ったり訪問先がわかりづらかったりしたが、参加した児童や保護者からは、「校区内を実際歩いてみて道もわかったし、こども110番の家の場所も把握できてよかった」という声をいただいた。事前にオリエンテーションをしておくべきだった、という今回の反省を生かしながら、来



年度も実施する予定である。

3. はぐくみの体制

住吉区は全市に先駆けて、「大阪市はぐくみネットコーディネーター住吉区連絡会」を発足し、事例報告を行い質問や情報交換の機会としている。メンバー構成はPTA会長・地域活動協議会・女性部・青少年指導員・青少年福祉委員で、イベント行事の円滑化や情報共有に役立っている。また見守り隊は、はぐくみ公式 LINE アカウントを取得し、地域や各団体に情報発信している。時にはペットボトル回収のリサイクル事業や、子ども食堂の開催日のアナウンスも行う。また小学校とも連携して学校からの緊急連絡を配信して、保護者からも信頼されており、有事の際にいつでも地域密着の情報を配信できる体制となっている。

4. コーディネーターの役割

地域・学校・家庭をつなぐ存在であるはぐくみコーディネーターは、文字どおりコーディネーターであるので、イベントの主催者とは区別をする必要がある。そこで清水丘では「まちプラス実行委員会」という委員会を地域活動協議会の構成団体の1つとして立ち上げ、令和6年4月から活動を始めた。

- 主な活動
- 春の遠足・・・飯ごう炊さんでカレーづくりを体験
 - 夏祭り・・・地域活動協議会の盆踊りと合同開催
 - 秋のジャンボオセロ大会・・・手づくりの直径90センチの木製オセロ盤を使用
 - 2月ポッチャ大会・・・区の推進競技で老若男女問わず一緒にできる。世代間交流。

これらの清水丘のイベントには、地域の人々だけでなく、墨江丘中学校学校元気アップ地域本部事業の元気アップコーディネーターとも連携して、中学生に募集をかけ、中学生がボランティアスタッフとして活躍してくれる。清水丘は実行委員会の体制をとることで、限られたメンバーだけでなく、ボランティアとして地域の人々や中学生の力も借りることができ、顔の見える関係づくりによっていざというときに役に立つ体制となっている。清水丘はぐくみネットは、地域のイベント活動を通じて、いろいろな団体をつなげる役目を担いつつ、これからも清水丘校区を盛り上げていきたい。

地域に根付いたはぐくみネット事業で、校区の特色を反映した防災・防犯活動などの活動や、地域の各組織をつないで展開する活動の報告でした。

【事例報告】学校元気アップ地域本部事業

中央区の東中学校区学校元気アップ地域本部から「東中学校の学校元気アップの取組み～東中生応援団～」というテーマで、様々な活動の紹介と、人材確保の工夫について報告されました。

大阪市立東中学校の校区は、中央区の官庁街・ビジネス街であるとともに大阪城などの観光名所もあるという特色ある地域である。そんな校区での学校元気アップの活動とこれまでの経過を報告したい。

1. 学校図書館支援

毎日昼休みと放課後に図書館を開館して、生徒の居場所になっている。転校生やクラスに馴染めない生徒の居場所でもある。本好きの生徒を増やしたいと思い、毎月の元気アップのお知らせに、本の紹介を載



せたり、100冊読破記念の校章入りプレミアムブックカバーを作ったりした。1年生の図書室ガイダンスで紹介すると、とても反響がよく、3年間で400冊以上も読むという生徒も出てきた。

- ・読み聞かせ会

学期末ごとに3回実施。新しい取り組みだが、40人から60人と図書室が満席になるほど集まる。

- ・図書館の運営支援

学校図書館司書の方と共同で紹介したい本の展示をしている。またパソコンが得意なボランティアが返却の遅れている本の督促状を作成している。

- ・図書館の季節の飾り作り



月初めにアイデアを出し、作業内容や作り方をグループLINEで募る。材料は図書館に置いていて来校できた時にいつでも作成できる。回を重ねるごとに華やかになり、仕上げや展示では集まって作業して対面でのコミュニケーションもとれ、生徒は、学校の中で一番季節感があると言ってくれる。

2. 華道体験

3年生の各クラスに、地域の華道の先生を招いて、華道の講義・先生のデモンストレーション・生徒による生け花体験（6人1組）を実施。生け上がった全作品をエントランスに飾り、全校生徒で鑑賞する。

3. その他の活動

- ・テスト前学習会

教室ごとに特徴を表す名前をつけ、生徒は申込み際に希望教室を書く。絶対に話さない「モクモク(黙々)ルーム」、少しなら話してよい「助け合いルーム」、グループで学習する人用の「ほっこりルーム」など。「モクモクルーム」の利用生徒からは、集中できて気持ちよく学習ができた、と、好評であった。



4. 元気アップメンバーの歩み

発足当初、元校長先生がコーディネーターで、PTA・地域の方によるボランティアが大勢いたが、次第に減少した。数年後に元東中学校教員で東中の生き字引と呼ばれた先生がコーディネーターを引継がれたが、その方も高齢となり、更なる後任探しが始まった。しかし決まるまでに5年もかかり、私たちはゼロベースからの再スタートとなった。

この間に、コロナ禍の活動自粛などでボランティアの数は減少し、一方で中央区はマンションの建設ラッシュにより、生徒数はどんどん増加して10年間で2倍弱。今後はさらに増える見込みで、ボランティアの確保が課題になった。

そこで、まず元気アップの活動を知ってもらうために、学校行事や地域活動に積極的に参加し、新しいコーディネーターの顔を覚えてもらった。それらの活動の中で、登録してもらえない理由や、継続できない問題点を探したところ、「活動内容がわかりにくい」、「子どもが卒業したらやめるものと思っていた」などの理由がわかってきた。そこでボランティア募集を始めるにあたって、仕事内容を明確にした募集要項を作成し、毎年4月のお知らせに掲載・配布したり、学校主催の保護者向けの図書室開館で興味を持ってもらったりする取り組みをした結果、現在はコロナ前の2倍以上の人数になり、充実した活動がで

きるようになった。また活動を見直す中で、元気アップ事業発足当初から華道ボランティアとして、毎週玄関などの3ヶ所に季節の花を生けてくださっている先生と、花のアレンジメントの先生がおられることがわかった。その方々にお話を聞くと、10数年もの間、花などの費用をすべて自己負担で生けておられたことがわかった。ボランティア活動として、これでは負担が大き過ぎるのではないかと校長先生に相談したところ、PTA役員さんに話が通り、PTA予算から花材費を出していただけることになった。お二人から「お金の問題ではないが、長年やってきたことが認められたと感じ、とてもうれしい。今後も生徒さんたちの情操教育になるよう続けていきたい。」とおっしゃっていただいた。

引き継ぎをきっかけに、コーディネーターの仕事をゼロから検討し、わからないことや困ったことは何でも校長先生に相談して、いろいろな活動につながってきた。ボランティアの登録時に留意していることは、応募された皆さんの得意とすること・好きなことを詳しく伺い、生かすこと。今後も、それぞれの得意を学校に繋ぎ、学校元気アップの活動を続けていきたい。

地域の学校応援団として、学校元気アップ事業を立て直した様子がわかり、コーディネーター同士のチームワークの良さが感じられる報告でした。

【意見交流会】

- ・はぐくみでの予算の使い方 ▶ (清水丘小) 地域活動協議会からの補助がある。はぐくみ新聞の作成などに使う。情報発信ツールとして、公式LINEアカウントを取得し、地域の情報・学校の情報を配信しているが、その費用も必要である。
- ・防災訓練体験で、子どもたちと地域の方が、本当に災害にあったときにすぐ動ける形を想定されていて、とても良いと感じた。中学校も一緒に巻き込んでいるのは見習いたい。
- ・このテーブルの参加の方が、卒業した母校に元気アップとして参加・活動をしていると聞き、感動した。
- ・生涯学習推進員をしている立場から聞いていた。自分たちの活動継続のためにも学校と繋がりを持っていく必要を感じた。
- ・地域でコーディネーターを探す秘訣は？▶ (東中) 本校では、学校や校長先生との連携により、人材探しがうまくいった。



【参加された方々の感想】 アンケートより抜粋

- ・スノーフレークリーダーシップは耳にしたことがあったが、今日詳しくわかった。
- ・基調講演の新崎先生のお話は良くわかった。"WALKING"は、なるほどと思い、覚えやすかった。
- ・事例発表をされた2校とも、ボランティアとはいえ、よく努力・協力されていると感じる。また学校の協力もあり、すばらしい事例だ。

- ・様々な地域の取組みがわかった。活動している方から直接詳しくお聞きすることで大変参考になった。
- ・勉強会のクラスのあり方が良かった。
- ・清水丘小学校の発表の防災訓練は勉強になった。
- ・コーディネーターはあくまでもコーディネーターだということを改めて思った。
- ・2つの活動報告をお聞きして、自分たちの活動とリンクしている部分もあるので、良い刺激になった。
- ・交流もあり良かった。